

大坪イカウ松遺跡

県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
(第2冊)

大坪イカウ松遺跡 第二冊

二〇〇七年三月

鳥取市教育委員会

2007. 3

鳥取市教育委員会

序 文

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成18年度に実施した鳥取市青谷町・大坪イカウ松遺跡の調査記録です。

鳥取市は平成16年11月に周辺8町村（国府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町）と合併し、人口約20万人を擁する山陰地方最大の都市になりました。鳥取市内の平野部をはじめ、丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく諸関係機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

なお、この報告書は不十分な所も多くありますが、私たちの郷土理解に役立てていただくとともに、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成19年3月

鳥取市教育委員会

教育長 中川俊隆

例　　言

1. 本書は、県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴って行った発掘調査のうち、平成18年度に国・県の補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財の記録である。
2. 調査を実施した遺跡は、大坪イカウ松遺跡である。
3. 本書に用いた方位は、第1・2図は座標北、第3図は磁北を示し、レベルは海拔標高である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 発掘調査から本書の作成にあたっては、多くの方々から指導・助言ならびに協力をいただいた。厚く感謝いたします。
6. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

発掘調査主体　鳥取市教育委員会

事　務　局　　鳥取市教育委員会文化財課

調　査　担　当　前田　均、山田真宏、谷口恭子、加川　崇

本文目次

序文・例言

はじめに	1
I. 発掘調査に至る経緯と経過	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 発掘調査の概要	7
おわりに	8

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 調査地位置図	1
第2図 調査地周辺遺跡分布図	3
第3図 調査地実測図	5、6
第4図 調査地内出土遺物実測図	8

図版目次

図版1	1. 調査地遠景（北東から） 2. 調査地遠景（東から） 3. 調査前全景（南から）
図版2	1. 掘下後全景（南から） 2. 掘下後全景（北から）
図版3	1. 西壁断面（南東から） 2. 西壁断面（北側）（南東から） 3. 南壁断面（北から）

- 図版4 1. 遺物出土状況(1) (西から)
2. 遺物出土状況(2) (西から)
3. 遺物出土状況(3) (西から)
4. 遺物出土状況(4) (西から)
5. 遺物出土状況(5) (南西から)
6. 遺物出土状況(6) (西から)
7. 遺物出土状況(7) (西北西から)
8. 遺物出土状況(8) (南西から)
- 図版5 1. 出土遺物(1)
- 図版6 1. 出土遺物(2)

《はじめに》

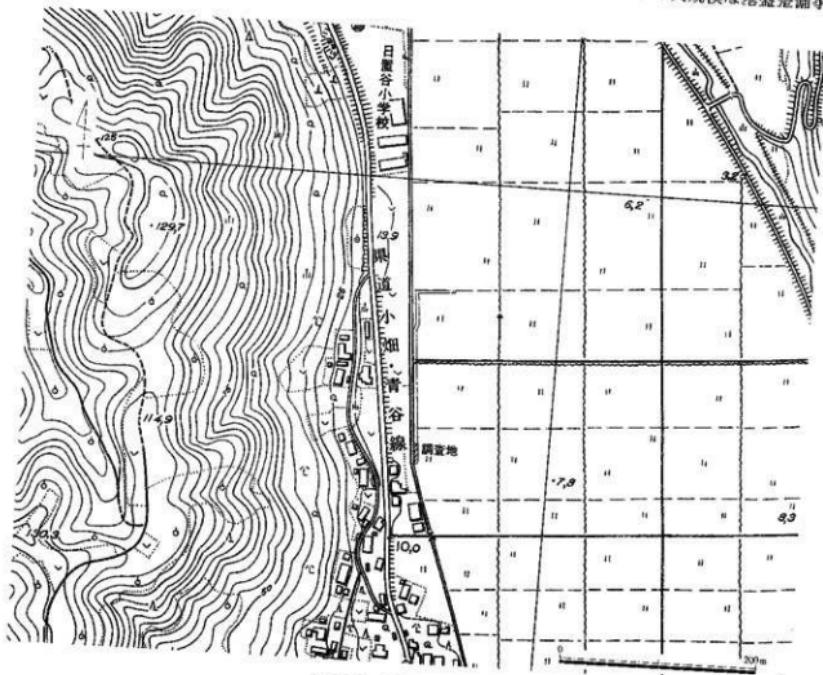
鳥取市は鳥取県東部に位置する山陰の中核都市で、県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担ってきた。平成16(2004)年11月には周辺8町村(國府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町)との市町村合併が成立し、面積765.66km²、人口20万人余りを擁する山陰地方最大の都市へと拡大することとなった。このことは、それまで市内に2300ヶ所余りとしてきた遺跡の数にも反映され、現在その数は倍増の約4,770ヶ所となりさらに増加の一途をたどっている。

このような新生鳥取市の中で、大坪イカウ松遺跡の所在する鳥取市青谷町大坪地区は、旧青谷町を大きく三分する2河川(勝部川と日置川)のうち東側の日置川下流域に位置する。日置川による細長い河谷平野である流域は日置谷と呼ばれ、大坪地区は川を挟んで蔵内地区に相対するこの日置谷の中央部西山麓に位置し、北は奥崎地区、南は早牛地区に隣接する世帯数60余りの地区である。

I. 発掘調査に至る経緯と経過

今回報告する大坪イカウ松遺跡は、大坪集落の北北東に隣接し、日置谷西側丘陵端の標高約6~7mの水田地帯に位置する。遺跡周辺では、後述のとおり西側丘陵上の弥生時代後期から古墳時代の大口遺跡群や丘陵端の弥生時代後期から奈良時代のカヤマ遺跡等が1980年代に調査された以外は、遺跡の様相はあまり知られておらず、近年の踏査や試掘調査によって遺構・遺物の散布状況が知られるようになっただところである。

その後、合併前の青谷町産業振興課から県営の日置谷地区経営体育成のための大規模な基盤整備事業



第1図 調査地位置図

計画の協議がもたらされた。そこで鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターと青谷町教育委員会で協議が行なわれ、遺跡の有無、その範囲・性格を知るための試掘調査が平成16年度から平成18年度にかけて青谷町教育委員会、合併後は鳥取市教育委員会によって実施されている。その結果、平野部の中央に推定される微高地に弥生時代から中・近世の遺跡がその粗密の違いや検出深度の違いはあるものの点在することが判明してきている。

今回の発掘調査は、この県営日置谷地区経営体育基盤整備事業計画に伴って、鳥取市教育委員会と関係機関との間で計画変更等も含めた種々の協議を行った結果、現状での遺跡の保護・保存が難しい深く掘り下げる水路部分について記録保存の調査を行うこととなったものである。調査の実施に当たっては、対象地の屈曲点や現況の水路部分等によって、調査地をI～IV区に区分けし、このうちI～III区の調査を鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センターが、IV区の調査を鳥取市教育委員会が実施することとなった。

IV区の調査は、平成19年1月初旬に着手し、調査に当たってはIII区の基準ラインをそのまま延長する形で測量杭を設定した。掘り下げは、耕作土および試掘調査で判明していた旧ほ場整備造成土を重機によって除去し、以下、水路施設の影響範囲の深度まで人力によって行った。調査に伴う写真撮影や実測等の記録類の作成を適宜行いながら、2月上旬に現地調査を終了した。調査面積は56.7m²である。なお整理作業の一部は現地作業と並行して進めたが、現地調査終了後に本格的に整理作業および報告書作成を行った。

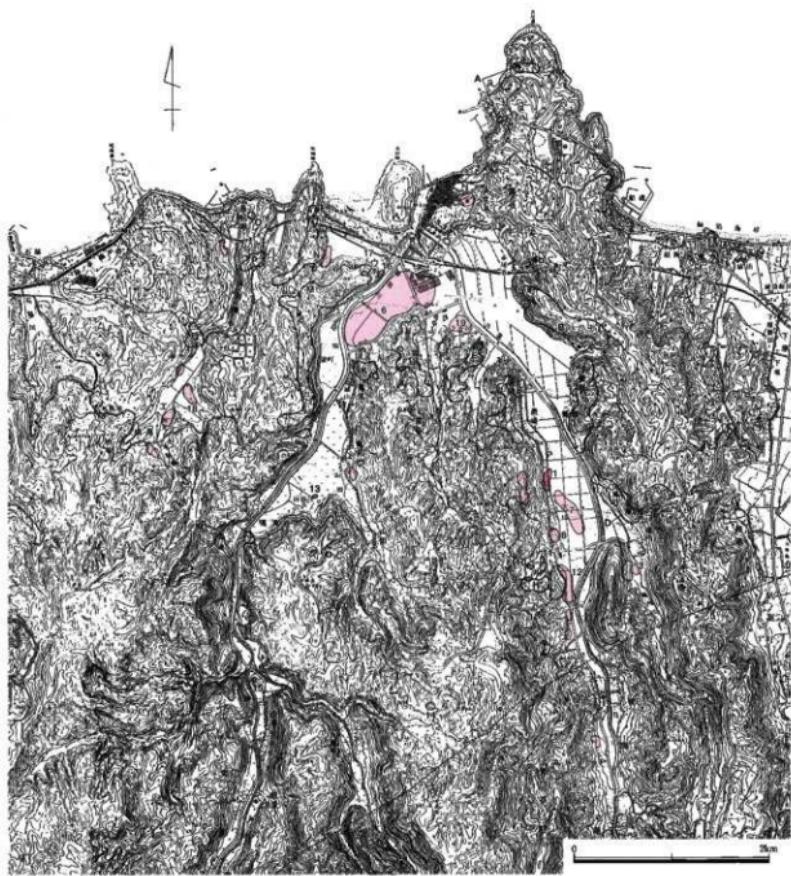
II. 遺跡の位置と環境

鳥取市青谷町地域は、鳥取県の中央よりやや東に位置し、東部地域の西端、旧国名で言えば因幡国に属し、伯耆国との国境にある。先述のとおり、平成16年11月1日に東部9市町村（鳥取市、国府町、福部村、川瀬町、佐治村、河原町、気高町、鹿野町、青谷町）が合併し、新鳥取市となった。鳥取県内でもその前後に市町村合併が進み、隣接町も泊村から湯梨浜町に変更となり、平成18年度現在で39市町村が18市町村になっている。

さて、鳥取市内における青谷町地域は、その南域は標高500mを超す山地で、そこから北へ伸びる溶岩台地が東西を取り囲み旧町域の境界をなしている。溶岩台地の北端は長尾鼻、オゴノ鼻と続き、30mを超える断崖となって日本海に突出している。また、溶岩台地の東を日置川、西を勝部川が流下し、河川近くで合流して日本海に注いでいる。合流地点付近に沖積平野、海岸部に砂丘が形成されている。青谷町内の砂浜は、全国的に珍しい鳴り砂の浜として知られている。

青谷町地域の遺跡は、確認されているものだけでも約480ヶ所あり、その大半は古墳である。また新鳥取市となり遺跡の数は約4,770ヶ所あり、旧青谷町の10倍に増加している。

今回調査した大坪イカウ松遺跡(1)は先述のとおり、青谷町の東側を流れる日置川下流域にある奥崎集落と大坪集落の間にある山裾の水田地帯に位置する。日置谷地区は昭和24年から大規模なほ場整備が行われているが、当時は現在のように重機等は使用されなかったので旧地形をそれほど大きく改変することができなかった。このため現在でも平野部の中央部分が高まり東西に向かって下がっていくという旧地形を見ることができる。このことから平野部の中央には自然堤防状の高まりの存在を想定することができ、現在の集落側と日置川側に2本の旧河川が存在すると考えられる。また近年実施した試掘調査の結果からも同様のことが想定される。この自然堤防状の高まりと考えられる部分には奈良時代から中世にかけての遺物や柱穴などを確認しているほか、弥生時代中期後葉の土器や溝状遺構を確認している。平成16年の調査では大坪岸ノ上遺跡として調査を実施したが、その後の調査で遺跡を分けるように旧河川が流れていることが想定できることから大坪イカウ松遺跡と大坪大繩手遺跡(7)、大坪岸ノ上遺跡(8)にそれぞれ分かれるものと考えられるようになった。このほか周辺の遺跡としては西側丘陵上に昭和59年に発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代にかけての土壙墓や貯蔵穴、堅穴住居跡が確認さ



- | | | |
|--------------|--------------|------------|
| 1. 大坪イカウ松遺跡 | 18. 長和瀬船塗尾遺跡 | O. 長和瀬古墳群 |
| 2. 青谷第1遺跡 | 19. 萩田傍水ヶ丘遺跡 | P. 長谷古墳群 |
| 3. 磨内上船塗跡 | | Q. 奥ノ口古墳群 |
| 4. 磨内上長谷第2遺跡 | A. 長尾鼻古墳群 | a. 長尾鼻1号墳 |
| 5. 磨内上長谷第4遺跡 | B. 阿古山古墳群 | b. 青谷2号墳 |
| 6. 青谷上寺地遺跡 | C. 美郷古墳群 | c. 阿古山22号墳 |
| 7. 大坪大岡手遺跡 | D. 磨内古墳群 | d. 吉川45号墳 |
| 8. 大坪岸ノ上遺跡 | E. 曽田古墳群 | |
| 9. 大口第1遺跡 | F. 奥崎古墳群 | |
| 10. 大口第2遺跡 | G. 大坪古墳群 | A. 利川神社 |
| 11. 大口第3遺跡 | H. 大口古墳群 | イ. 神前神社 |
| 12. 力ヤマ遺跡 | I. 早牛古墳群 | ウ. 相馬神社 |
| 13. 鳴瀬宮ノ前遺跡 | J. 露谷古墳群 | エ. 鳴瀬神社 |
| 14. 山田渓谷東平遺跡 | K. 亀尻古墳群 | |
| 15. 田原谷宮下遺跡 | L. 鳴瀬古墳群 | 一凡 例一 |
| 16. 若本遺跡 | M. 吉川古墳群 | X 遺物散布地 |
| 17. 青谷第4遺跡 | N. 井手古墳群 | ■ 主要古墳 |

第2図 調査地周辺遺跡分布図

れた大口第1遺跡(9)、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけての墳丘墓、竪穴住居跡が確認された大口第2遺跡(10)が存在する。また丘陵裾部には昭和56年に県営は場整備事業に伴い発掘調査が実施され、弥生時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡や古墳が確認されたカヤマ遺跡(12)などがある。カヤマ遺跡周辺は「カヤマ千軒」という伝承が残っており、古くから人が住むことのできる環境であったと考えられる。またこの遺跡では上馬が出土しており、今回調査の大坪イカウ松遺跡地点からも馬形や人形、斎弔を含む律令期の祭祀具が出土していることから、両遺跡の密接な関係が想定される。

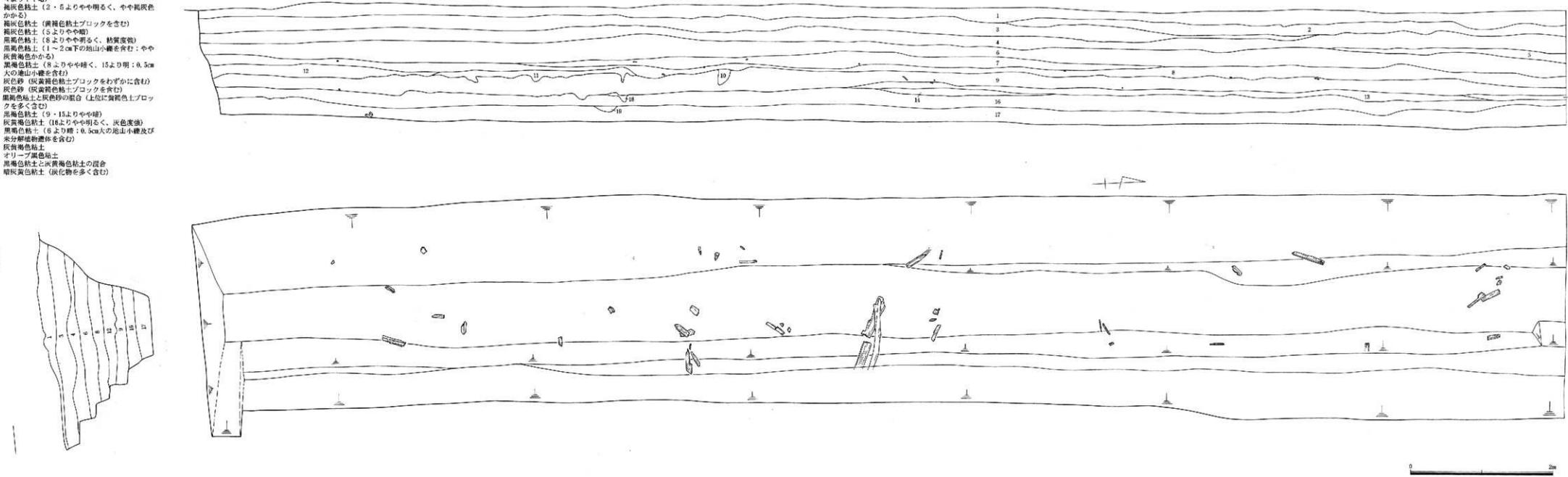
なお、その他の青谷町域の遺跡は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡は、今のところ確認されていないが、青谷町は砂丘地に立地しているため、今後発見される可能性もある。縄文時代の遺跡としては、砂丘地にある県立青谷高等学校新築時のボーリングにより偶然発見された青谷第1遺跡(2)がある。ここでは詳細は不明ながら地表面下6.3mから縄文時代中期から弥生時代、古墳時代にかけての土器片が出土している。またこのほかの遺跡としては縄文時代前期の土器片の散布が確認された蔵内上長谷第2遺跡(4)、1995年に試掘調査が実施され、縄文時代後期の土器片が出土した蔵内上長谷第4遺跡(5)、網見部落側の石皿や石斧が出上した長和瀬稻葉尾遺跡(18)が挙げられ、さらに今年度の調査でも縄文時代晩期の土器片が出土している。

弥生時代を代表する遺跡として青谷上寺地遺跡(6)がある。青谷上寺地遺跡は青谷町の西側を流れる勝部川と東側を流れる日置川の合流点付近に位置する。平成9年から15年にかけて町による試掘調査が実施され、平成10年から12年にかけて(財)鳥取県教育文化財団による発掘調査が、13年から18年には鳥取県埋蔵文化財センターによって遺跡の範囲確認調査及び内容確認調査が実施されている。その結果、縄文時代晩期から奈良時代にかけての遺物や構造が確認されており、現在では青谷上寺地遺跡の大まかな範囲が確定してきている。その中でも遺跡の中心となる弥生時代後期の大規模な護岸施設や祭祀場跡、水田跡などのほか、当時の牛糞がわかる鍬・鍛錠などの木製農耕具や石庖丁、漁労具など多く出土している。これらの多種多量の遺物は、コンテナ2,400箱以上の土器、精巧な作りの木製容器類や大量の建築材、全国最多となる227点の卜骨、約270点の鉄製品など量・質共に日本を代表する遺跡といえよう。また、朝鮮半島系の無文土器など外来系の土器、貨泉や鏡、石材などの交流を示す遺物も数多く出土しており、当時の青谷がいかに繁栄していたのかが良く分かる。弥生時代後期の溝の中からは約5,300点にのぼる多量の人骨が出土し、中には殺傷痕のある人骨も確認されている。また出土した頭蓋骨3点の中には弥生人の脳が遺存しており、今後の研究によっては弥生人のルーツを知ることができるかもしれない。膨大な量の遺物が出土したことから現在も整理作業が続けられ、平成18年には弥生時代の楼観と考えられる7.24mの柱が新たに確認されている。このほかの弥生時代の遺跡としては、青谷上寺地遺跡周辺の丘陵上ではほぼ完形の弥生時代中期の壺が出土した青谷第4遺跡(17)、蔵内水船遺跡(3)、田原谷宮下遺跡(15)などがある。

古墳時代になると青谷町の中央及び東西の丘陵上に多数の古墳が造営されている。現在確認されている古墳や散布地は海岸から約6km以内の位置に分布し、ほとんどの古墳は直径10mから20m程度の円墳である。町内の主な古墳としては東側の台地・丘陵には北側から町内最大の前方後円墳である長尾鼻1号墳(a)（全長34m）を有する長尾鼻古墳群(A)、町内第2の前方後円墳である青谷2号墳(東山古墳b/全長28m)、船や車などの線刻が施された県の史跡に指定されている阿古山22号墳(c)を有する阿古山古墳群(B)、養郷古墳群(C)、蔵内古墳群(D)と続く。中央部の丘陵には東側尾根北側から善出古墳群(E)があり、市の史跡に指定されている奥崎古墳群(F)、大坪古墳群(G)、大口古墳群(H)、早牛古墳群(I)と連なっている。中央西側の丘陵には露谷古墳群(J)、その西側に龜尻古墳群(K)、その奥には金塚が出土した鳴滝古墳群(L)が連なっている。西側の丘陵上には100基以上の古墳からなり、船の線刻が施された吉川43号墳(d)を有する吉川古墳群(M)が存在し、その西側の丘陵には井手古墳群(N)、長和瀬古墳群(O)、長谷古墳群(P)、釜ノ口古墳群(Q)と続いている。この時期の古墳以外の遺跡としては前述の青谷第1遺跡、青谷上寺地遺跡、大口第1・第2・第3遺跡、カヤマ遺跡などが知られるのみで、あま

1. 灰褐色粘土 (褐灰色かる)
2. 褐灰色粘土 (黄灰色粘土ブロックを含む)
3. 黑褐色粘土 (2よりやや明るく、灰質褐色かる；4よりやや暗)
4. 棕褐色粘土 (2・5よりやや明るく、やや褐灰色かる)
5. 褐褐色粘土 (黄褐色粘土ブロックを含む)
6. 褐褐色粘土 (5よりやや暗)
7. 黑褐色粘土 (2よりやや明るく、棕褐色かる)
8. 黑褐色粘土 (1・2cmの地山小礫を含む；やや灰褐色かる)
9. 黑褐色粘土 (8よりやや暗く、1.5より明；0.5m以上の地山小礫を含む)
10. 灰褐色粘土 (1よりやや明るく、ブロックを含む)
11. 灰色砂 (灰褐色粘土ブロックを含む)
12. 黑褐色粘土と灰砂の混合 (上位に灰褐色粘土ブロックを多く含む)
13. 黑褐色粘土 (9・13よりやや暗)
14. 黑褐色粘土 (8よりやや明るく、灰土度)
15. 黑褐色粘土 (8より明；0.5mの地山小礫及び未分離物體を含む)
16. 灰褐色粘土
17. オリーブ褐色粘土
18. 黑褐色粘土と灰褐色粘土の混合
19. 灰褐色粘土 (炭化物を多く含む)



第3図 調査地実測図

り数多くの遺跡は確認されていない。

奈良時代以降の遺跡もあまり多くは知られていないが、代表的なものとしては善田傍示ヶ崎遺跡(19)、山田淡谷東平遺跡(14)、前述の青谷上寺地遺跡、カヤマ遺跡などがある。善田傍示ヶ崎遺跡は露谷川を供給源とし、馬形や人形、斎中など律令期の祭祀具が大量に出土しており、周辺に役所に関連する遺跡が存在する可能性がある。さらに青谷上寺地遺跡でも数点ではあるが、馬形や斎中、転用硯が出土しており、青谷町内の複数の箇所で律令祭祀が行われていたことが想定される。また平成9年に発掘調査が実施された山田淡谷東平遺跡は、大坪集落から西側に丘陵を一つ隔てた南側に面した中腹に立地し、中世の礎石建物跡、鍛冶に関連する鉄滓、釘などが確認されている。

歴史上の資料としては、因幡国の官道に置かれた4力所の駅のうち「柏尾駅」の有力な候補地といわれる相屋神社(ウ)がある。しかし湯梨浜町で確認されている笏賀駅からの距離が近いことなどから明確な位置やルートははっきりと判ってはいない。ただし、相屋神社周辺には「下馬ノ子」、「上馬ノ子」などの馬に関する地名が残っている。また部民制度に由来するといわれる日置・勝部などの郷名が今も残つており、町内の式内社である利川神社(ア)と幡井神社(エ)がそれぞれ牛・鶴見に、式外社である相屋神社と神前神社(イ)がそれぞれ青谷・鳴滝にあることは、何らかの遺跡との関わりがあると考えられる。

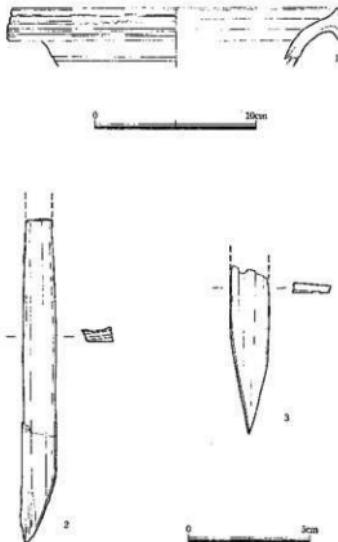
III. 発掘調査の概要

大坪イカウ松遺跡は、日置川による河谷平野に推定される複数の旧河道に沿って形成された微高地上の一帯に形成されているものと考えられる。今回の調査対象地は、日置谷地区の基盤整備地内西端部の水路予定地で南から北に延びる丘陵の東側裾に位置する。また、対象地は北からI～IV区に分けられ、今回調査を行ったIV区はそのうちの最南端部にあたる。当該地の標高は7.2mほどで、昭和24年からのほ場整備以降水田として利用されている。

調査地の基本的層序は、耕作土下に旧ほ場整備造成土と見られる褐灰色粘土(第2～4)層があり、その下に遺物包含層の褐灰色粘土(第5、6)層、同じく遺物包含層の黒褐色粘土(第7、8、9)層、灰黄褐色粘土(第10)層、オリーブ黒色粘土(第11)層と続く。

遺構の検出は、旧ほ場整備造成土下面(第5、6層上面)、黒褐色粘土(第7、8)層上面、灰黄褐色粘土(第10)層上面で行った。その結果、今回の調査範囲内からは明瞭な遺構は検出されなかった。

遺物は、岡化するには至らなかったが、旧ほ場整備造成土(第2～4層)およびその下の褐灰色粘土(第6)層から古墳時代以降のものと見られる須恵器、土師器片が僅かに出土している。また、その下の黒褐色粘土(第7、8、9)層中からは、弥生時代後期から古代にかけての土器片と木器片が出土している。このうち土器はほとんどが体部細片で端部もなく岡化が困難であったが、壺の口縁部(1)は外反して端部を拡張し沈線4条が施される。頸部にも1条の沈線が認められる。1/12程度の遺存で、復元口径は約19.9cmである。木器は長さ數cmから50cm大と大きさの違いはあるものの、板状木製品およびその断片と考えられるもの30点余り、細長い板状も含めた棒状のもの10点余り、小板杭端部片3点、角杭端部片1点、丸杭端部片1点が検出されている。また、その他木器加工時に出たものか木っ端多数も出土しており、そのうちには端部が焼け焦げたものも多く認められる。このうち祭祀具と考えられる2点を岡化した。木取りはいずれも板日である。(2)は遺存長13.35cm、幅1.35cm、厚さ0.6cmを測る。一端部は欠失するものの、遺存の小口側には2ヶ所の裂け口が認められ、切り掛けの可能性が考えられる。類似すると見られる細長い台形状に薄板の両端を斜めに切り落とした木製品が今回調査のII・III区からも検出されており斎中と考えられている。(3)は遺存長6.9cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。細長い薄板の一端を両側から剣先状に尖らせた串状の木製品で、II・III区からも同様の先端部を持つ斎中が多数検出されている。以上のことから(2)、(3)はいずれも断片ながら斎中と考えられる。



第4図 調査地内出土遺物実測図

《おわりに》

今回のIV区の調査結果は上述のとおりであるが、以下、調査の所見にふれることでごく簡単ではあるがまとめの代わりとしたい。

今回の調査地は、標高7m程度、日置谷と呼ばれる東の河谷平野に面した丘陵裾に位置する。本報告のIV区の調査では明瞭な遺構は検出されず、土器片と木製品の出土にとどまった。しかしながら、同じく調査されたIV区と続くI～III区の調査では、土器、石製品等と多量の木製品とともに護岸施設と見られる構造物が幅2mほどの細長い調査区ながら数ヶ所で検出されている。このことは試掘の際の予察にもあったが、今回の調査区が旧河道の肩部に位置することを示唆しているもの、あるいは丘陵裾部に水路等の遺構が遺存することを示唆しているものとも考えられる。

また遺物は量的には多くはなくいずれも包含層からの出土であるが、弥生土器、土師器、須恵器のはか、木製品が出土している。また隣接のI～III区の調査でも純文土器、弥生土器、土師器、須恵器、木製品が検出されている。これらのことから、本遺跡が、弥生時代から律令期に数期の盛期をもつ集落遺跡で、なおかつ律令祭祀が周辺で行われた遺跡であることがあらためて確認された。

なお本遺跡の周辺に目を向けると、日置川流域では、上流域には土馬が出土した力ヤマ遺跡が所在し、下流域には大量の木製祭祀具の出土した善田傍示ヶ崎遺跡や、弥生時代後期を中心とするものの僅かながら律令期の木製祭祀具も出土している古谷上守地遺跡などが所在している。その距離は直線で3kmあまりであり、今後は何らかの関係が存在することも考慮に入れながらの調査研究が必要となろう。また周辺の開発にはこれまで以上に十分な配慮が必要で、開発側と更なる協議を進めるとともに具体的な遺跡の把握に努めたい。

写 真 図 版

図版 1



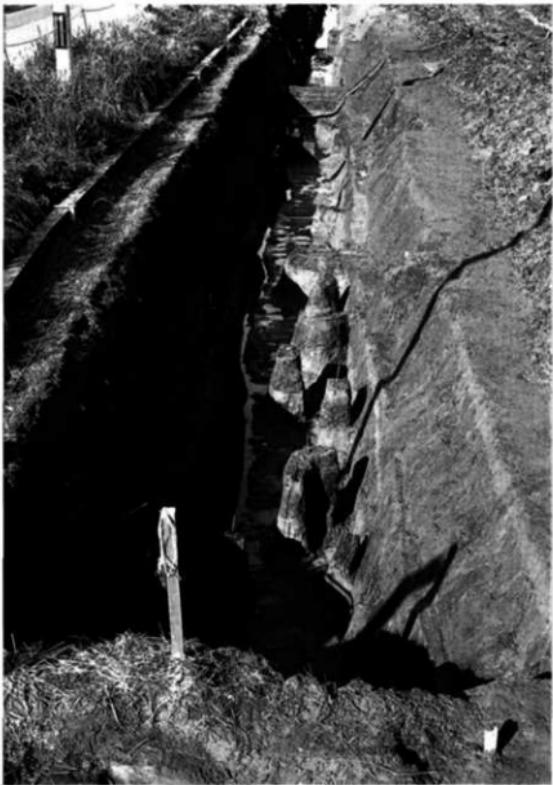
1. 調査地遠景（北東から）



2. 調査地遠景（東から）



3. 調査前全景（南から）



1. 堀下後全景（南から）



2. 堀下後全景（北から）

図版 3



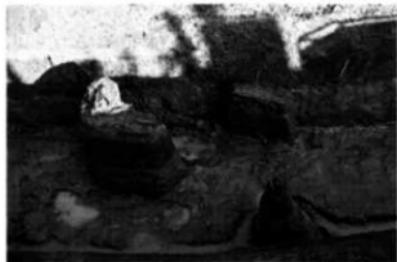
1. 西壁断面（南東から）



2. 西壁断面（北側）
(南東から)



3. 南壁断面（北から）



1. 遺物出土状況(1) (西から)



2. 遺物出土状況(2) (西から)



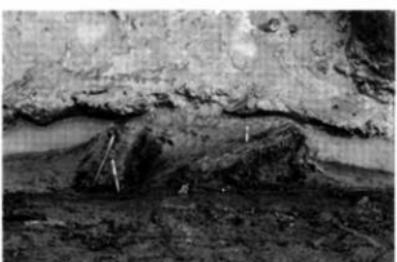
3. 遺物出土状況(3) (西から)



4. 遺物出土状況(4) (西から)



5. 遺物出土状況(5) (南西から)



6. 遺物出土状況(6) (西から)

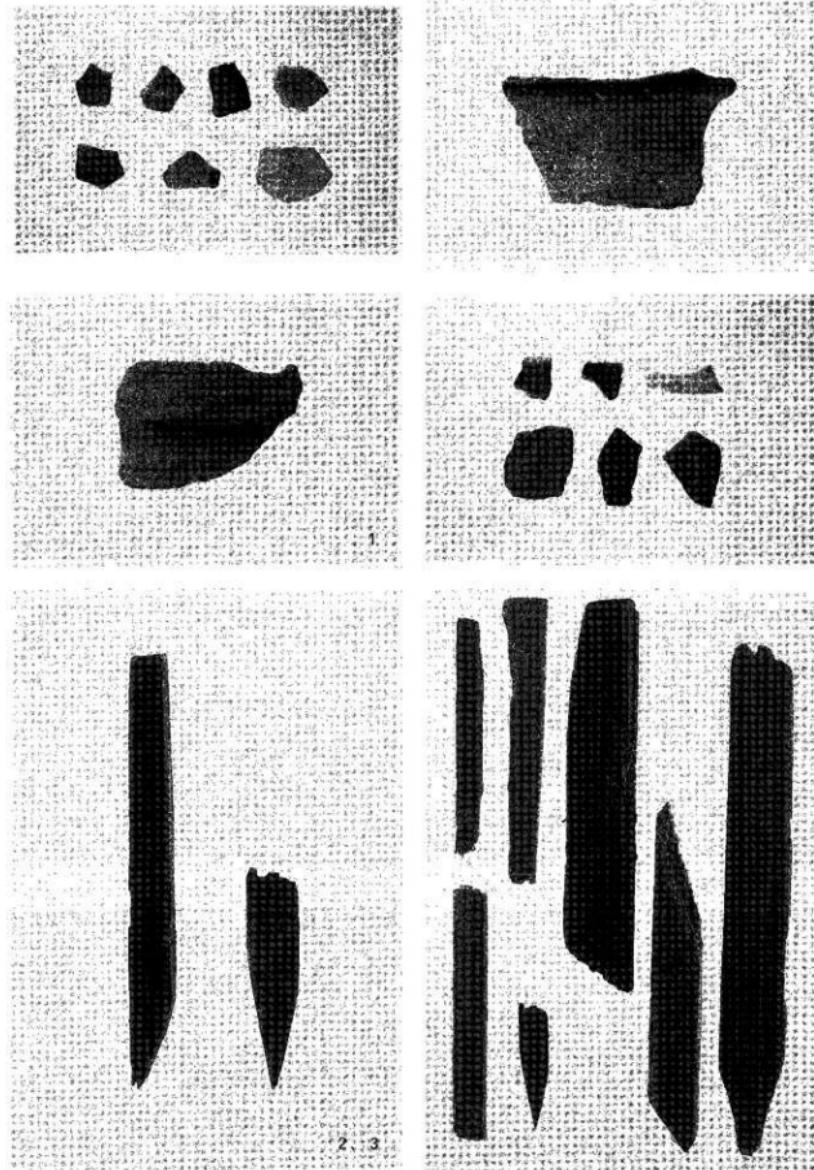


7. 遺物出土状況(7) (西北西から)

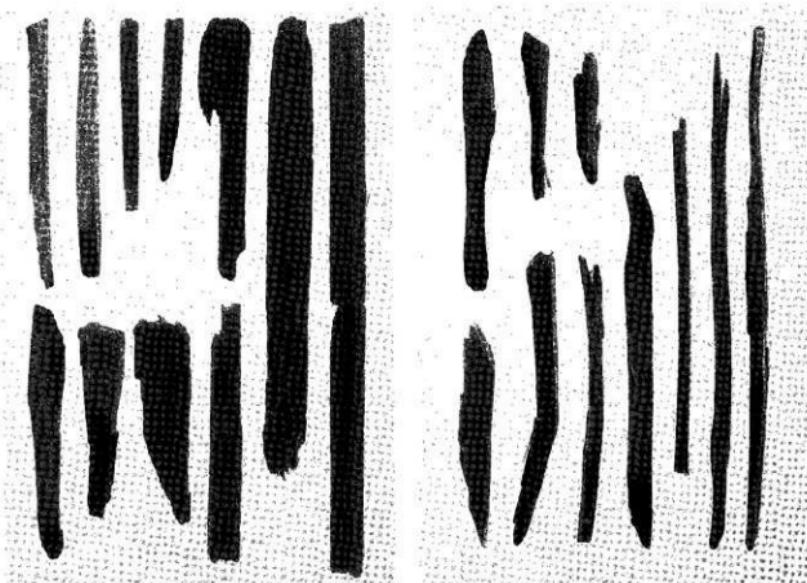


8. 遺物出土状況(8) (南西から)

図版 5



1. 出土遺物(1)



1. 出土遺物(2)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おおつぼいかうまついせき							
書名	大坪イカウ松遺跡							
副書名	県営日置谷地区経営体育城基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（第2冊）							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	加川 崇 山田 真宏							
編集機関	鳥取市教育委員会							
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市尚徳町116番地 TEL(0857)20-3367							
発行年月日	西暦2007年3月23日							
所取遺跡名	所在	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおつぼいかうまついせき 大坪イカウ松遺跡	おおつぼいかうまついせき 鳥取市青谷町大坪	31201		35° 20' 48"	134° 0' 34"	20070109 ~ 20070208	56.7	基盤整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
おおつぼいかうまついせき 大坪イカウ松遺跡	集落跡	弥生時代 ~奈良・ 平安時代	(遺物包含層)	壇、壺中、板状木製品				

大坪イカウ松遺跡
県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（第2冊）

平成19(2007)年3月発行

編集 烏取市教育委員会
発行 平080-8571 烏取県烏取市典徳町116番地
TEL (0857) 20-3387

印刷 総合印刷出版株式会社
〒680-0022 烏取市西町1丁目215番地
TEL (0857) 23-0631
